『マツヤ・プラーナ』第184章：和訳と註解

――『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」について(3)――

宮　本　久　義

１．はじめに

本稿は『東洋大学文学部紀要第60集インド哲学科篇 XXXII』に和訳と註解を試みた『マツヤ・プラーナ』第183章の続きで，第184章を訳出したものである。前回取り上げた第183章は，シヴァ神がこの聖地に特別の愛着を持ち，どうして「離れられない（場所）」となったのかの理由を，神妃パールヴァティーが尋ね，それに対してシヴァ神が答える形式になっていたが，第184章は全編シヴァ神が語る形式になっている。内容的には特別なエピソードはないが，悪人でさえもこの聖地にひとたび足を踏み入れそこで死ねば解脱が得られることが，繰り返し強調されている。

テクストには，*Matsyapurāṇa*. Ananda Ashrama Sanskrit Series 54, Poona, 1981. を用いた。また，*The Matsyapurāṇam*. H. H. Willson (forworded), 2 vols., Delhi: Nag Publishers, 1983.に付された英訳があるが，今回の部分ではほとんど参考にならなかった。

２．『マツヤ・プラーナ』第184章和訳

maheśvara uvāca―
マヘーシュヴァラ（シヴァ神）が言った。

sevitaṃ bahubhiḥ siddhair apunarbhavakāṅkṣibhiḥ /
viditvā tu paraṃ kṣetram avimuktanivāsinām //1
tad guhyaṃ devadevasya tat tīrthaṃ tat tapovanam /
paraṃ sthānaṃ tu te yānti saṃbhavanti na te punaḥ //2

（２）

〔この聖地には〕再生を願わない多くのスィッダ（成就者）が住み，アヴィムクタに住む者たちにとって最高の聖地であると知って，そこが神々の中の神（シヴァ）の秘密であり，聖地であり，苦行林である最高の聖域に赴けば，彼らは再び生まれることはない。

jñāne vihitaniṣṭhānāṃ paramānandam icchatām /
yā gatir vihitā sadbhiḥ sā ’vimukte mṛtasya tu //3
知識を追究し最高の歓喜を望む者にとっての，善き人々によって得られる境地（解脱）が，アヴィムクタで死ぬ者には〔得られる〕。

註）gati は動詞語根√gam（行く）の派生語で，「行くこと，動くこと」（going, moving），さらに「輪廻の道や状態」（the course of the soul through numerous forms of life, metempsychosis, condition of a person undergoing this migration）を表し（M. Monier-Williams, A Sanskrit-English Dictionary, p.347.），「帰趨」と訳されることが多いが，ここでは内容的に考えて「境地（解脱）」と意訳した。

bhavasya prītir atulā hy avimukte hy anuttamā /
asaṃkhyeyaṃ phalaṃ tatra hy akṣayā ca gatir bhavet //4
アヴィムクタには，シヴァ神の無比で至高の喜び（愛情）があり，無数の果報がそこにはあり，まさに不滅の境地（解脱）がある。

paraṃ guhyaṃ samākhyātaṃ śmaśānam iti saṃjñitam /
avimuktaṃ na sevante vañcitās te narā bhuvi //5
〔ここは〕最高の秘密といわれ，火葬場（シュマシャーナ）とも呼ばれる。
アヴィムクタに住まない人々は，地上における見捨てられた人間である。

avimukte sthitaiḥ puṇyaiḥ pāṃśubhir vāyuneritaiḥ /
api duṣkṛtakarmāṇo yāsyanti paramāṃ gatim //6
風に吹き上げられたアヴィムクタの善果をもたらす土〔が降りかかること〕によって，非常な悪事を働いた者でも最高の境地に赴く。

avimuktaguṇān vaktuṃ devadānavamānavaiḥ /
na śakyate 'prameyatvāt svayaṃ yatra bhavaḥ sthitaḥ //7
シヴァ神自身がそこに居住するアヴィムクタの美徳は，〔それと〕比較されるものがないがゆえに，神やダーナヴァ（半神）や人間によって語られることができない。

anāhitāgnir no yaṣṭā no 'śucis taskaro 'pi vā /
avimukte vased yas tu sa vased īśvarālaye //8
祭火の儀式を行わない者，崇拝しない者，不浄の者，あるいは盗人でも，アヴィムクタに住む者は，自在神（シヴァ）の居所に住む〔ことになる〕。

註）no 'śucis の no は否定辞にとると「不浄でない者」の意になり文意にそぐわないので，アヴァグラハ記号を取って訳した。また，第 8 詩節から第17詩節までは Willson のテクストにはない。

tatra nāpuṇyakṛt kaścit prasādād īśvarasya ca /
ajñānāj jñānato vā 'pi striyā vā puruṣeṇa vā //9
yat kiṃcid aśubhaṃ karma kṛtaṃ mānuṣabuddhinā /
avimukte praviṣṭasya tat sarvaṃ bhasmasād bhavet //10
そこでは自在神の恩恵により，不善をなす者はだれもいない。
知らずにあるいは故意に，女性あるいは男性により，どんな善くないことが人知でなされたとしても，アヴィムクタに入ったならば，そのすべては灰燼に帰す。

saritaḥ sāgarāḥ śailās tīrthāny āyatanāni ca /
bhūtapretapiśācāś ca gaṇā mātṛgaṇās tathā //11
śmaśānikaparivārāḥ priyās tasya mahātmanaḥ /
na te muñcanti bhūteśaṃ tān bhavas tu na muñcati //12
河川や海や山岳や聖地や聖所や，ブータ，プレータ，ピシャーチャや眷族や母神群や，火葬場に付随する者は，かの偉大な魂の愛しい者たちである。
彼らは生類（悪霊）の主（シヴァ）を放さないし，シヴァ神も彼らを放

さない。

註）bhūta は悪霊，preta は死霊（死後，浄化儀礼を受けていない存在），piśāca は食人鬼。śmaśānika は，「火葬場に住む者，頻繁に出入りする者」の意（Monier-Williams, p.1094.）で，火葬職の人とも考えられるが詳細不明。シヴァ神はこれら多くの眷族を従えているので，bhūteśa という語は「生類の主」とも「悪霊の主」とも訳せる。

ramate ca gaṇaiḥ sārdham avimukte sthitaḥ prabhuḥ /
dṛṣṭvaitān bhītakṛpaṇān pāpaduṣkṛtakāriṇaḥ //13
anukampayā tu devasya prayānti paramāṃ gatim /
bhaktānukampī bhagavāṃs tiryagyonigatān api //14

眷族とともにアヴィムクタに憩う主（シヴァ神）は，悲惨さに恐れおののき，悪事をなすそれらの者たちを見て，信徒に対する憐れみを持つ神（シヴァ神）は畜生道に陥った者たちをも，神の憐れみ（共感）により，最高の境地に導く。

nayaty eva varaṃ sthānaṃ yatra yānti ca yājñikāḥ /
bhārgavāṅgirasaḥ siddhā ṛṣayaś ca mahāvratāḥ //15

祭官たちやブリグ族やアンギラス族，スィッダたち，聖仙たち，大制戒者たちが赴く最上の聖地に導く。

avimuktāgninā dagdhā agnau tūlam ivā ”hitam /
na sā gatiḥ kurukṣetre gaṅgādvāre ca puṣkare //16

火にくべられた草のごとく，アヴィムクタの火に焼かれて〔浄化された〕その境地は，クルクシェートラ，ガンガードヴァーラ，プシュカラにはない。

註）クルクシェートラはデリー北方のハリヤーナー州にあるヒンドゥー教聖地で，『マハーバーラタ』の大戦争が行われた場所，ガンガードヴァーラはウッタルプラデーシュ州の聖地ハリドワールの別名，プシュカラはラージャスターン州にあるブラフマー神の聖地。（宮本：1995, pp.110-112; 2005, pp.19-28参照）

sā gatir vihitā puṃsām avimuktanivāsinām /
tiryagyonigatāḥ sattvā ye 'vimukte kṛtālayāḥ /
kālena nidhanaṃ prāptās te yānti paramāṃ gatim //17
その境地はアヴィムクタに住む人々に得られる。
畜生道に陥った者たちで，アヴィムクタに住む人々は，死の時が至ると，最高の境地に赴く。

merumandaramātro 'pi rāśiḥ pāpasya karmaṇaḥ /
avimuktaṃ samāsādya tat sarvaṃ vrajati kṣayam //18
悪人の行為の蓄積がメール山やマンダラ山くらい〔大きいもの〕であっても，アヴィムクタに至れば，その全ては消滅する。

śmaśānam iti vikhyātam avimuktaṃ śivālayam /
tad guhyaṃ devadevasya tat tīrthaṃ tat tapovanam //19
シヴァ神の居所であるアヴィムクタは，火葬場として知られる。
それは神々の中の神の秘密であり，聖地であり，苦行林である。

tatra brahmādayo devā nārāyaṇapurogamāḥ /
yoginaś ca tathā sādhyā bhagavantaṃ sanātanam //20
upāsante śivaṃ muktā madbhaktā matparāyaṇāḥ /
そこではブラフマー神をはじめとする神々や，ナーラーヤナ（ヴィシュヌ神）をはじめとする［神々］や，ヨーギンたちや，サーディヤ（半神）たちや，解脱した者たちや私の信者たち，私の崇拝者たちが，永遠なる神であるシヴァを崇拝している。

yā gatir jñānatapasāṃ yā gatir yajñayājinām //21
avimukte mṛtānāṃ tu sā gatir vihitā śubhā /
知識や苦行〔で得られる〕境地や供犠を行うことで得られる境地，その素晴らしい境地が，アヴィムクタで死ぬ者たちには得られる。

saṃhartāraś ca kartāras tasmin brahmādayaḥ surāḥ /22
そこには，破壊者や行為者や，ブラフマーを始めとする神々がいる。

samrāḍvirāṇmayā lokā jāyante hy apunarbhavāḥ /
maharjanas tapaścaiva satyalokas tathaiva ca //23
君主や戦士のいる世界，マハル界，ジャナ界，タパス界，サティヤ界は生じるが，〔滅した後〕再び生じることがない。

註）文意が不明である。マハル界等の四つは，ヒンドゥー教の世界観の一種を表したもので，スヴァル・ローカ（天界）の上方に順次位置する界である。（定方晟：1985, pp.102-104.参照）

manasaḥ paramo yogo bhūtabhavyabhavasya ca /
brahmādisthāvarāntasya yoniḥ sāṃkhyādimokṣayoḥ //24
過去・未来・現在にいる者には，心との最高の結合がある。
ブラフマー神に始まり不動のもの（山，植物等）には，サーンキヤ等の解脱の胎がある。

註）一応訳は付けたが，文意は不明である。サーンキヤは一般的にはインド六派哲学の一つの派で主知主義的な二元論による解脱を説くが，ここでは Epic Sāṃkhya の流れをふまえたものが説かれていると考えられる。「サーンキヤ等の解脱」という両数は，多少強引に解釈すれば，サーンキヤ的解脱とヨーガ的解脱を指すのかも知れない。

ye ’vimuktaṃ na muñcanti narās te naiva vañcitāḥ /
uttamaṃ sarvatīrthānāṃ sthānānām uttamaṃ ca yat //25
アヴィムクタを離れない人々は，決して見捨てられない。
すべての聖地の中の至上のものであり，またそこは〔すべての〕場所の中の至上のものである。

kṣetrāṇām uttamaṃ caiva śmaśānānāṃ tathaiva ca /
taḍāgānāṃ ca sarveṣāṃ kūpānāṃ srotasāṃ tathā //26
まさに聖地の中の至上のものであり，同様にまさに火葬場の中の〔至上の〕ものである。同様にすべての池，井戸，流れの中の〔至上のもの〕である。

śailānām uttamaṃ śailaṃ tīrthānām uttamaṃ tathā /
puṇyakṛdbhavabhaktaiś ca hy avimuktaṃ tu sevyate //27
山岳の中の至上の山岳であり，同様に聖地の中の〔至上のもの〕である。
それゆえ善人のシヴァ神の帰依者はアヴィムクタに住むべきである。

brahmaṇaḥ paramaṃ sthānaṃ brahmaṇā 'dhyāsitaṃ ca yat /
brahmaṇā sevitaṃ nityaṃ brahmaṇā caiva rakṣitam //28
〔ここは〕ブラフマー神の最高の場所であり，ブラフマー神が住んでもいる。
常にブラフマー神に住まわれ，またまさにブラフマー神に守られている。

atraiva saptabhuvanaṃ kāñcano meruparvataḥ /
manasaḥ paramo yogaḥ prītyarthaṃ brahmaṇaḥ sa tu //29
ここにはまさに七つの世界，黄金のメール山〔がある〕。
それは心の最高の結合であり，ブラフマー神の愛しい対象である。

brahmā tu tatra bhagavāṃs trisaṃdhyaṃ ceśvare sthitaḥ /
puṇyāt puṇyatamaṃ kṣetraṃ puṇyakṛdbhir niṣevitam //30
そこではブラフマー神は三時（日昇・南中・日没）にわたり，自在神に依拠している。
善行の者たちによって住まわれる善中の善なる聖地である。

ādityopāsanaṃ kṛtvā viprāś cāmaratāṃ gatāḥ /
ānye 'pi ye trayo varṇā bhavabhaktyā samāhitāḥ //31
また，太陽神崇拝をなしてバラモンたちは不死に至る。
他の三種のヴァルナ（種姓）の者たちも，シヴァ神に対する信愛により解脱を得る。

avimukte tanuṃ tyaktvā gacchanti paramāṃ gatim /
aṣṭau māsān vihārasya yatīnāṃ saṃyatātmanām //32
ekatra caturo māsān māsau vā nivaset punaḥ
avimukte praviṣṭānāṃ vihāras tu na vidyate //33

アヴィムクタで身体を捨て，最高の境地に赴く。
心を制御した修行者は，八か月間住んだり，一か所で四か月あるいは二か月住むべきである。
〔しかし〕アヴィムクタに入った者たちには，住むことさえ知られない（不必要である）。

na deho bhavitā tatra dṛṣṭaṃ śāstre purātane /
mokṣo hy asaṃśayas tatra pañcatvaṃ tu gatasya vai //34
そこでは身体が未来に存在することは，古い教典に見られない。
そこでは死者は五大に還って解脱することは疑いない。

striyaḥ pativratā yāś ca bhavabhaktāḥ samāhitāḥ /
avimukte vimuktās tā yāsyanti paramāṃ gatim //35
夫に貞節な女性，シヴァ神の帰依者，専心する者は，アヴィムクタで解脱し，最高の境地に赴く。

anyā yāḥ kāmacāriṇyaḥ striyo bhogaparāyaṇāḥ /
kalena nidhanaṃ prāptā gacchanti paramāṃ gatim //36
他の，愛欲に駆られ享楽に耽る女性たちは，死の時が至れば，最高の境地に赴く。

yatra yogaś ca mokṣaś ca prāpyate durlabho naraiḥ /
avimuktaṃ samāsādya nānyad gacchet tapovanam //37
人々によって得るのが困難な〔神との〕結合や解脱が得られるアヴィムクタに至ったならば，他の苦行林に行くべきではない。

sarvātmanā tapaḥ sevyaṃ brāhmaṇair nātra saṃśayaḥ /
avimukte vased yas tu mama tulyo bhaven naraḥ //38
バラモンは全霊を傾けて苦行を修すべきことは疑いない。
アヴィムクタに住む者は，私と同じ存在になるであろう。

yato mayā na muktaṃ hi tv avimuktaṃ tataḥ smṛtam /
avimuktaṃ na sevante mūḍhā ye tamasā ”vṛtāḥ //39
viṇmūtraretasāṃ madhye te vasanti punaḥ punaḥ /
私がそこから離れないゆえに，「アヴィムクタ」と知られるべきである。
アヴィムクタに住まない者たちは，愚かでタマス（暗質）に覆われている。
〔彼らは〕繰り返し大小便や精液の中に住むことになる。
註）タマスは，主としてサーンキヤ思想が説く人間を含む物質的存在の三つの構成要素の一つで，ほかの二つはサットヴァ（純質）とラジャス（激質）である。

kāmaḥ krodhaś ca lobhaś ca dambhastambho ’timatsaraḥ //40
nidrā tandrā tathā ”lasyaṃ paiśunyam iti te daśa /
avimukte sthitā vighnāḥ śakreṇa vihitāḥ svayam //41
アヴィムクタにはシャックラ（インドラ神）自身によってもたらされた愛欲，憤怒，貪欲，欺瞞，昏睡，羨望，睡眠，懶惰，怠惰，誑言という十種の障碍がある。

vināyakopasargāś ca satataṃ mūrdhni tiṣṭhati /
puṇyam etad bhavet sarvaṃ bhaktānām anukampayā //42
〔また〕ヴィナーヤカの〔もたらした〕災難（不幸）が常に頂点に存在する。
〔しかし〕このすべてが〔シヴァ神の〕帰依者に対する憐れみにより善となる。
註）ヴィナーヤカは象頭神ガネーシャのことで，ヴィグネーシャ（障碍の主）という別名も持ち，自分を礼拝する者には障碍を除去し恩恵を授けるが，一方，従わない者にはかえって願い事の成就を邪魔するという，両義的な力を行使する。（宮本：1995, p.157.参照）

paraṃ guhyam iti jñātvā tataḥ śāstrānudarśanāt /
vyāhṛtaṃ devadevais tu munibhis tattvadarśibhiḥ //43
最高の秘密であると知って，教典を熟慮することによって，神々の中の

神たちや真理を洞察する聖仙たちによって〔最高の秘密であると〕説かれた。

medasā viplutā bhūmir avimukte tu varjitā /
pūtā samabhavat sarvā mahādevena rakṣitā //44
saṃskāras tena kriyate bhūmer anyatra sūribhiḥ /
骨髄の散乱する大地は，アヴィムクタにはない。
すべては浄められ，マハーデーヴァ（シヴァ神）によって守られている。
彼（シヴァ神）により浄法（葬送儀礼）が行われ〔るので〕，賢者たちは大地以外の場所で〔浄法を行う〕。

ye bhaktyā varadaṃ devam akṣaraṃ paramaṃ padam //45
devadānavagandharvayakṣarakṣomahoragāḥ /
avimuktam upāsante tan niṣṭhās tat parāyaṇāḥ //46
te viśanti mahādevam ājyāhutir ivānalam /
信愛によって恩恵を授ける神であり，不滅で最高の境地であり，神，ダーナヴァ，ガンダルヴァ，ヤクシャ，ラクシャ，大蛇が，崇拝するアヴィムクタに住み，そこを庇護所とする者たちは，精製バターが祭火に入るように，アヴィムクタに〔入る〕。

taṃ vai prāpya mahādevam īśvarādhyuṣitaṃ śubham //47
avimuktaṃ kṛtārtho ’smīty ātmānam upalabhyate /
かの吉祥なる自在神が住むマハーデーヴァに至って，「私はアヴィムクタを得た」と言ってアートマン（個我）を得る（と合一する）。

ṛṣidevāsuragaṇair japahomaparāyaṇaiḥ //48
yatibhir mokṣakāmaiś ca hy avimuktaṃ niṣevyate /
nāvimukte mṛtaḥ kaścin narakaṃ yāti kilbiṣī //49
真言の復誦や護摩を修する聖仙，神，アスラの群れにより，また，解脱を願う修行者たちによって，アヴィムクタは住まわれるべきである。
アヴィムクタで死ぬ者は，たとえ罪人でも地獄に赴かない。

īśvarānugṛhītā hi sarve yānti parāṃ gatim /
dviyojanam athārdhaṃ ca tat kṣetraṃ pūrvapaścimam //50
ardhayojanavistīrṇaṃ dakṣiṇottarataḥ smṛtam /
vārāṇasī tadīyā ca yāvac chuklanadī tu vai //51
eṣa kṣetrasya vistāraḥ prokto devena dhīmatā /
自在神の恩恵を得て，すべての者は最高の境地に赴く。
この聖地は東西に 2 ヨージャナ半ずつである。
南北は半ヨージャナずつの長さであると知られる。
それにヴァーラーナスィーがあり，その間に浄らかな川（ガンガー）が〔流れている〕。
これが思慮深い神によって説かれた聖地の詳細である。
註）第183章61-62ab に同様の記述があるが，そこでは vārāṇā 'sī（ヴァラナー川とアスィー川）となっていて，その方が正確である。

labdhvā yogaṃ ca mokṣaṃ ca kāṅkṣanto jñānam uttamam //52
avimutaṃ na muñcanti tan niṣṭhās tat parāyaṇāḥ /
tasmin vasanti ye martyā na te śocyāḥ kadācana //53
最上の知識を希求する者たちは，ヨーガ（結合）と解脱を得て，アヴィムクタを離れず，そこに居を定め，そこを庇護所とする。
そこに住む死すべき者たち（人間）は，いかなる時にも悲しむことがない。

yogakṣetraṃ tapaḥkṣetraṃ siddhagandharvasevitam /
saritaḥ sāgarāḥ śailā nāvimuktasamā bhuvi //54
ヨーガ（結合）の聖地であり，苦行の聖地であり，スィッダ・ガンダルヴァが〔そこに〕住む。
地上にアヴィムクタに等しい河川，海，山岳はない。

bhūrloke cāntarikṣe ca divi tīrthāni yāni ca /
atītya vartate cānyad avimuktaṃ prabhāvataḥ //55
地上界にも空間にも天界にも聖地はあるが，アヴィムクタは圧倒的に他を超えている。

ye tu dhyānaṃ samāsādya yuktātmānaḥ samāhitāḥ /
saṃniyamyendriyagrāmaṃ japanti śatarudriyam //56
avimukte sthitā nityaṃ kṛtārthās te dvijātayaḥ /
bhavabhaktiṃ samāsādya ramante tu suniścitāḥ //57
静慮に専心し，三昧状態に入り，各種の感官を制御し，シャタルドリヤを唱えるバラモンたちは，アヴィムクタに常に住み，目的を果たし，シヴァ神の恩恵を得て堅固な心を持ち，憩う。
註）śatarudriya はルドラ（シヴァ神）を称える真言。

saṃhṛtya śaktitaḥ kāmān viṣayebhyo bahiḥ sthitāḥ /
śaktitaḥ sarvato muktāḥ śaktitas tapasi sthitāḥ //58
karaṇānīha cā ”tmānam apunarbhavabhāvitāḥ /
taṃ vai prāpya mahātmānam īśvaraṃ nirbhayāḥ sthitāḥ //59
〔そのような人は〕シャクティによって愛欲を捨て，〔欲望の〕対象の外に住み，シャクティによってすべてから解放され，シャクティによって苦行に住する。
そしてこの世〔で作った〕原因は，アートマンを再生させない。
かの偉大な魂である自在神を得て，無畏に住する。

na teṣāṃ punar āvṛttiḥ kalpakoṭiśatair api /
avimukte tu gṛhyante bhavena vibhunā svayam //60
幾百千万劫を経ても，彼らには再生はない。
アヴィムクタでは遍在するシヴァ神自身によって受け入れられている。

utpāditaṃ mahākṣetraṃ sidhyante yatra mānavāḥ /
uddeśamātraṃ kathitā avimuktaguṇās tathā //61
人々は〔シヴァ神によって〕造られた偉大な聖地で〔解脱を〕成就する。
アヴィムクタの美徳がこのように簡略に語られた。

samudrasyeva ratnānām avimuktasya vistaram /
mohanaṃ tad abhaktānāṃ bhaktānāṃ bhaktivardhanam //62
海に〔多くの〕宝石がある如く，アヴィムクタには多くのものがある。

帰依しない者には迷妄があるが，帰依者には信愛の増加がある。

mūḍhās te tu na paśyanti śmaśānam iti mohitāḥ /
hanyamāno ’pi yo vidvān vased vighnaśatair api //63
〔ここをただの〕火葬場であると迷妄する愚か者は，〔聖地であると〕見ない。
何百もの障碍に邪魔されても，賢者は〔ここに〕住むべきである。

sa yāti paramaṃ sthānaṃ yatra gatvā na śocati /
janmamṛtyujarāmuktaḥ paraṃ yāti śivālayam //64
彼は最高の場所に行き，そこに行って憂うことがない。
生，死，老いから解放され，最高のシヴァ神の居所に行く。

apunarmaraṇānāṃ hi sā gatir mokṣakāṅkṣiṇām /
yāṃ prāpya kṛtakṛtyaḥ syād iti manyeta paṇḍitaḥ //65
再死することなく，解脱を希求する者にその境地がある。
〔なぜなら〕学僧がそれを得て，目的を果たした，と考える〔から〕。

na dānair na tapobhir vā na yajñair nāpi vidyayā /
prāpyate gatir iṣṭā yā hy avimukte tu labhyate //66
喜捨によっても，苦行によっても，供犠によっても，知識によっても
到達できない望みの境地が，アヴィムクタでは得られる。

nānāvarṇā vivarṇāś ca caṇḍālā ye jugupsitāḥ /
kilbiṣaiḥ pūrṇadehāś ca prakṛṣṭaiḥ pātakais tathā //67
bheṣajaṃ paramaṃ teṣām avimuktaṃ vidurbudhāḥ /
様々なヴァルナ（種姓）の者，ヴァルナ外の者，嫌悪されるチャンダーラたちや，罪深い者，特別の違法者である，彼ら愚かな者たちにとって，アヴィムクタは最高の癒しの場である。

註）第67詩節は一応このように訳したが，明確には理解できなかった。

jātyantarasahasreṣu hy avimukte mriyeta yaḥ //68
bhakto viśveśvare deve na sa bhūyo 'bhijāyate /
yatra ceṣṭaṃ hutaṃ dattaṃ tapas taptaṃ kṛtaṃ ca yat //69
何千もの生まれかわりの中で，アヴィムクタで死ぬヴィシュヴェーシュヴァラ神の帰依者は，再び生まれることがない。
そこでは望みの供物が捧げられ，苦行がなされる。

sarvam akṣayam etasminn avimukte na saṃśayaḥ /
kālenoparatā yānti bhave sāyujyam akṣayam //70
このアヴィムクタでは，すべてが不滅であることは疑いない。
時が滅した者たちは，シヴァ神と不滅の融合をする。

kṛtvā pāpasahasrāṇi paścāt saṃtāpam etya vai /
yo 'vimukte viyujyeta sa yāti paramāṃ gatim //71
何千もの罪を犯した後に悔恨し，アヴィムクタで〔身体と〕離れる者は，最高の境地に赴く。

uttaraṃ dakṣiṇaṃ cāpi ayanaṃ na vikalpayet /
sarvas tasya śubhaḥ kālo hy avimukte mriyeta yaḥ //72
〔死んだ後の〕北や南の道は考える必要がない。
なぜなら，アヴィムクタで死ぬ者にとっては，すべての時が吉祥であるから。
註）北や南の道とは，太陽が北行する六か月間，すなわち冬至から夏至までの間に死んだ者は解脱への道を辿り，南行する六か月間，すなわち夏至から冬至の間に死んだ者は輪廻への道を辿るとする考え。

na tatra kālo mīmāṃsyaḥ śubho vā yadi vā 'śubhaḥ /
tasya devasya māhātmyāt sthānam adbhutakarmaṇaḥ /
sarveṣām eva nāthasya sarveṣāṃ ca vibhoḥ svayaṃ //73
そこでは，時は吉祥であれ不吉であれ，考慮する必要がない。
〔ここは〕かの神の威光により，特別の業の場所であり，すべてのものは主自身のものであり，すべてのものは遍在者〔自身〕のものである。

śrutvedam ṛṣayaḥ sarve skandena kathitaṃ purā /
avimuktāśramaṃ puṇyaṃ bhāvayet karaṇaiḥ śubhaiḥ //74
以前スカンダによって語られたこのことを聞いて，すべての聖仙は吉祥なる手段によって善果をもたらすアヴィムクタに住むべきである。

《テクスト》

Matsyapurāṇa. Ananda Ashrama Sanskrit Series 54, Poona, 1981.（底本）
The Matsyapurāṇam. H. H. Willson (forworded), 2 vols., Delhi: Nag Publishers, 1983.

《参考文献》

Eck, Diana L., *Banaras: City of Light*. London: Routledge & Kegan Paul, 1983.
Singh, Rana P. B., *Towards the Pilgrimage Archetype: The Pañcakrośī Yātrā of Banāras*. Varanasi: Indica Books, 2002.
上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫，1992.
小西正捷・宮本久義編『インド・道の文化誌』春秋社，1995.
定方晟『インド宇宙誌』春秋社，1985.
菅沼晃編『インド神話伝説辞典』東京堂出版，1985.
宮本久義『ヒンドゥー聖地　思索の旅』山川出版社，2003.
宮本久義「『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」について」，『東洋大学文学部紀要第59集インド哲学科篇 XXXI』，2006，pp. 1 ～20.
宮本久義「『マツヤ・プラーナ』第183章：和訳と註解―『マツヤ・プラーナ』所収の「ヴァーラーナスィー・マーハートミヤ」について」(2)―」『東洋大学文学部紀要第60集インド哲学科篇 XXXII』，2007，pp.47～70.
渡瀬信之訳『マヌ法典』中公文庫，1991.

《キーワード》マツヤ・プラーナ，ヴァーラーナスィー，マーハートミヤ，ヒンドゥー教，聖地巡礼

《英文タイトル》

MIYAMOTO, Hisayoshi:
A Japanese Translation and Notes of The Vārāṇasī-māhātmya in *Matsyapurāṇa* (3)